

[20]

氏名	福井 春菜
博士の専攻分野の名称	博士（外国語教育学）
学位記番号	外博第36号
学位授与の日付	2023年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	A Longitudinal Study of Motivation to Learn Two Languages Simultaneously: Exploring the Narratives of Japanese Students in a Study-Abroad Context
論文審査委員	主査教授 八島 智子 副査教授 竹内 理 副査教授 アンドリュー・バーク 専門審査委委員 教授 中田 賀之 (同志社大学)

論文内容の要旨

福井春菜氏の博士学位請求論文 A Longitudinal Study of Motivation to Learn Two Languages Simultaneously: Exploring the Narratives of Japanese Students in a Study-Abroad Context（動機づけに関する長期的な研究：第二言語と第三言語を学ぶ日本人留学生のナラティブより）は、以下の9章から成り立っている。

- 第1章：Introduction（序章）
- 第2章：Literature Review（関連先行研究の概観）
- 第3章：Context of the Study（研究が行われたコンテキスト）
- 第4章：Method（研究方法）
- 第5章：Findings（研究結果）
- 第6章：Interpretation of the Major Categories（析出された主なカテゴリーの解釈）
- 第7章：Overall Discussion（総合的考察）
- 第8章：Research Implication（研究の示唆）
- 第9章：Conclusion（結論）

References（引用文献、163編）

Appendices (A-F)（付録）

グローバル人材育成の一環として英語教育関連の施作や留学プログラムが多様化する中で、英語に加えて第三言語を学ぶためアジア圏に留学する学生が増加している。このような状況に鑑み、本博士論文ではアジア圏への留学を通して第三言語を学ぶ学習者の心理、特に動機づけに注目する。具体的には、第二言語の英語と第三言語の中国語を同時に学習するために、台湾に留学する日本人大学生を対象に、その学習経験と動機づけの変化について長期的な調査を行う。

第1章では、第三言語学習動機づけの研究を日本で実施する意義について、社会的背景および動機づけ研究の動向の観点から述べた後、本論文の構成を提示している。

第2章では、動機づけという概念の定義をした上で、第二言語学習動機づけ研究の歴史、主要な先行研究と理論的枠組みを紹介している。近年、第二言語習得分野の研究において、言語学習のプロセスや心理の変化など動的で創発的な側面に注目し、複雑に要因が絡み合う様子を捉えようとする傾向があることを踏まえ、本論文でもそのようなアプローチを取るとしている。

次に、第三言語に関連した動機づけ研究を概観し、この領域の研究がヨーロッパに集中しており、日本での研究、アジア語を対象とした研究がまだ少ないことを指摘している。さらに、留学に関連した動機づけ研究も概観した上で、多様な背景を持つ学習者や英語以外の言語を対象とした研究の必要性を述べている。

本論文の研究で取り入れる動機づけの理論的枠組みとして（あくまでも分析の結果データに基づき妥当な理論として取り入れたものであるが）、多くの先行研究が依拠している The L2 motivational self-system (Dörnyei, 2005) と、複数言語を同時に学習する場合に有効な理論として The multilingual motivational self-system (Henry, 2017) を取り上げている。最後に、先行研究で十分に調査されていない研究の空所を明示した上で、本論では、台湾に留学し第二、第三言語を学習する日本人大学生3人を対象とし、以下の4つの研究目的を設定したことを述べている。

- (1) 日本人大学生が第二、第三言語を学ぶために台湾に留学することを選択した動機づけを探る。
- (2) 台湾への留学中の第二、第三言語学習の動機づけの変化と学習経験を追い、理解を深める。
- (3) 日本へ帰国後に第二、第三言語を学習し続ける動機づけと、その変化を探る。
- (4) 参加者の語りや分析結果を検討し、参加者に共通したプロセスと、それぞれ学習者独自の経験を探る。

第3章では、研究が行われたコンテキスト、特に留学先での学習環境、授業スケジュールを紹介している。

第4章では、研究対象者3名を詳しく紹介し、データ収集方法について説明している。本論文は質的研究であり、主なデータは留学前・留学中・留学後に行われた計6回の半構造化面接と、参加者が自ら動機づけの上下を描いたグラフ (Motivation Graph) である。

次に分析方法を説明している。Strauss & Corbin (1998)のオープン・コーディング手法を用いて面接データからカテゴリーの抽出を行い、さらに Valsiner (2007)の時間経過に伴う3レベル(microgenetic, mesogenetic, ontogenetic)に沿ってカテゴリーに分類する。カテゴリーの抽出と分類に加え、参加者の動機づけの変化と言語学習の経験を理解するため、参加者それぞれのナラティブ(語り)をデータから再構築したプロセスを説明している。

第5章では、研究の結果を提示している。まず、留学前、留学中、留学後のインタビューから析出されたカテゴリーに時間軸の分析を加えた表と、Motivation Graphを示し、次に、学習者それぞれの留学前、留学中、留学後のナラティブの記述が続く。ナラティブはMotivation Graphのデータ、析出されたカテゴリー、面接の一部抜粋を織り交ぜながら再構築したものである。このナラティブから研究対象者の視点から語られる第二言語および第三言語学習の動機づけに影響した様々な経験を読み取ることができ、さらに質的研究でしか導きだすことができない複雑な心情の変化を描き出している。

第6章では、3人の分析結果やナラティブを比較検討し、7つの主要カテゴリー群を選び出している。それぞれの主要カテゴリーについて、内容を確認し、先行研究や理論と照らし解釈を加えている。7つの主要カテゴリー群は以下のとおりである。

(1) The ideal multilingual self

The ideal multilingual selfは上で述べた理論的枠組みに準拠した概念で、多言語話者としての理想的な自己像である。研究対象者の内2名は、多言語、多文化コミュニティに参加することで、今まで想像することもできなかった多言語・多文化世界の存在に気づき、その経験を通して多言語話者としての理想自己イメージを持つようになったと分析している。

(2) The ought-to L2 English/L3 Chinese self and ideal L2 English/L3 Chinese self

理論的枠組 The L2 motivational self-system (Dörnyei, 2005)に準拠する概念 ideal L2 self と ought-to L2 self に沿ったカテゴリーである。研究対象者3名はいずれも留学前から第二、第三言語それぞれの ideal self と ought-to self を表象し、それが動機づけにつながっていることを認めている。

(3) Struggling to balance English and Chinese

英語と中国語の学習をバランスよく進めていくことの難しさと、どちらか一つの言語に集中したい気持ちとの葛藤を表している。

(4) Forming communities and relationships during SA

留学中のコミュニティ形成と人間関係の変化に関するカテゴリーである。

(5) Language buddies

Language buddy は、日常生活や言語習得のサポートをする台湾人の学生である。Buddy との関係性の構築に関連したカテゴリーである。

(6) Social networking sites and communication

留学中・留学後におけるソーシャルメディアの使用法と役割に関するカテゴリーである。

(7) Job hunting in Japan and language learning motivation

帰国後の就職活動に関するカテゴリーで、言語学習動機づけへの影響を表すカテゴリーを含んでいる。

第 7 章では研究の要約を提示し、第 8 章では本論文の研究分野への貢献や意義として以下のようにまとめている。

- (1) ナラティブアプローチを取り入れることにより、複雑な学習者の動機づけの変化と学習経験への理解を深めることができた。
- (2) Valsiner (2007) の時間経過に伴う 3 レベルを分析に取り入れることにより、一時的な感情的反応と、より長い時間保たれる心理状態を区別することができた。
- (3) これまでヨーロッパが中心の第三言語動機づけ研究において、新たな文脈における多言語学習の動機づけの様相を提示することができた。
- (4) 長期的なデータ分析により Ideal multilingual self というカテゴリーが確認された。

第 9 章では、教育的示唆として、二言語を同時に学習する上でバランスを取り続けることの難しさや苦しさを理解し、それに配慮したカリキュラムを作る重要性を述べている。また、多言語・多文化コミュニティが大きな役割を果たしていることから、コミュニティ形成をサポートすることなどを提案している。さらに、本論文の限界点と今後の研究の方向性を示している。

最後に、研究対象者が第三言語を学ぶことにより、英語だけを学んでいた時には思い描くことができなかった多言語・多文化コミュニティを想像することができるようになった点に注目し、世界の多様性を受け入れ、アジアをはじめ多文化に対応できる「グローバル人材」への一歩を踏み出したことを歓迎して、論文を結んでいる。

論文審査結果の要旨

論文の提出に先立ち、提出要件審査委員会（委員：八島智子、竹内 理、アンドリュー・バーク各教授）は、福井春菜氏が本研究科の定める「博士論文（課程博士）審査に関する覚書」の論文提出基準を満たしているかどうかを確認した。その結果、同氏は、1）必要単位（10 単位）を取得済みであり、博士論文のテーマと関連する分野で 2）論文 3 編（査読あり国際誌掲載論文 1 編）、3）口頭発表 2 回（うち国際大会 2 回）を有し、4）博士論文聴聞会（2022 年 6 月 4 日）も重大な問題の指摘なく終了しており、論文提出のすべての要件を満たしていることが確認できたため、研究科委員会（2022 年 7 月 27 日開催）に報告し、同氏からの論文提出を承認する決議を得た。これを受けて 2022 年 9 月 29 日に福井氏から提出された論文を学位請求論文として受理し、研究科委員会（2022 年 10 月 12 日開催）において承認された論文審査委員会（主査：八島智子、副査：竹内 理、副査：

アンドリュー・バーク各教授；学外委員：中田賀之同志社大学教授）での審査に入った。同時に所定の閲覧期間と手続きをもって、研究科構成専任教員への論文開示も行った。

提出された英文論文（209頁）は、第二言語の英語と、第三言語の中国語を学習するために台湾に留学する日本人の大学生3名を対象にしたナラティブ研究をまとめたものである。留学前に2回、留学中に3回、帰国後に1回、それぞれ1～3時間をかけて、合計6回の半構造化面接を行い厚いデータを収集している。分析は、オープン・コーディングおよび・カテゴリー化により、語りを抽象化するプロセスを経たのち、析出したコードやカテゴリーを用いつつ、元の語りに戻り、その流れを大事にしながらか再構成するというプロセスを通して、ナラティブ（論文では *narrative summary* と呼んでいる）を書き上げている。これは、必要に応じて実際の語りや会話を引用し、他のデータ源（動機づけの変化を表すグラフや友人ネットワークグリッドなど）を参照しつつ、ナラティブを再構成するという方法で、Barkhuizen et al. (2014)などが提唱している。それぞれの参加者の動機づけの浮き沈みをきめ細やかに追ひ、その時々感情を盛り込みながら、生き生きとしたストーリーが描かれている。一方、同じく Barkhuizen et al. に従い、析出されたコードやカテゴリーを再度吟味し、主要カテゴリー群（コアカテゴリー）として3名の参加者に共通して見られるプロセスやテーマに注目するなど、ある程度一般化する方向への試みも行なっている。このような個々のケースを丁寧に扱いながら、コード化、カテゴリー化を通して、一定程度の一般化を試みることは極めて難しい作業であり、高く評価できる。ナラティブに加え、Valsinar (2007)にヒントを得た時間軸という観点からのコード化の試み、さらには、動機づけ理論を用いたカテゴリーの再吟味により、複雑な心理の変化を解明していく。こういった作業を通して参加者が、二言語を同時に学習することの苦しみ、特に認知的容量の競合という点での葛藤を味わいながらも、決して最後まで諦めず学習を続けたこと、そのうち2名は、英語だけでなく多言語を使う自己像 (*ideal multilingual self*) を理想の姿として表象するようになったことを報告しており、高い評価に値する。

最後に、このプログラムに参加したことの一つの成果として、研究対象者たちが英語だけを学んでいた時には、決して思い描くことができなかった多言語・多文化コミュニティーを、第三言語を学ぶことにより想像できるようになったことを挙げている。さらに論文冒頭で述べたグローバル人材の開発の必要性に再度言及し、留学を通して、中国語と英語を用いて多言語・多文化コミュニティーに実際に参加したことにより、アジアをはじめ世界の多様な人々と繋がりたいという思いを強く持つようになったことを歓迎して論文を終えている。つまり参加者たちが、多言語・多文化を受け入れる意識や態度を獲得し、グローバル人材への一歩を踏み出したことを示唆しており、またそれを肯定的に捉える研究者の姿が垣間見える。

上記に加え、以下の6点からも、本論文は優れているものと判断することができる。

- (1) 質的研究として、留学前・留学中・留学後計6回のインタビューを通して、長期にわたる極めて厚いデータをとっていること。
- (2) その結果、動機づけの長期的変化を追うことができていること。これ

までは、数量研究や、長くても1学期程度を追うものが多い言語学習動機づけ研究の分野に、新たな貢献となっている。

- (3) また、ヨーロッパにおいて先行研究はあるものの、研究がまだまだ未開拓といえる第二言語第三言語同時学習の動機づけの研究である。しかも日本人の英語・中国語の学習を対象とし、留学を絡めたという点で、新規性、希少性が認められる。
- (4) 分析方法について、Strauss & Cobin が提案するコーディングとカテゴリー化という時間のかかる作業を極めて入念に繰り返し、語りの本質に迫ろうとしている。また、「分析メモ」を用いて解釈の妥当性を確認しつつ進めたことも評価できる。
- (5) 学習者の語りが、動機づけとの関連でどのような時間的経験を表しているのかを検討するために、Valsinar の時間軸に沿った分析を加えていること。つまり、一過性の出来事や瞬時の感情的反応と、そういった出来事の繰り返しを経て一定の安定性を持って維持する状態を区別する作業を行い、動機づけに関わる心理を構造的に分析している点が評価できる。
- (6) 研究対象者が、台湾に留学していたタイ人のコミュニティに参加し、そこで中国語・英語を用いて、コミュニケーションを楽しむ状況を分析することにより、留学という経験が、多くの場合、多言語多文化経験であるということを示した点。
- (7) 面接後にデータ内容について研究参加者に提示し、分析から削除してほしい部分の確認を行う、授業観察においても研究参加者の意向を最優先するなど、研究参加者の気持ちや意向を大事にする態度が各所に見られること。

なお、本論文では、研究参加者に対して十分な説明をおこない、彼らが同意のもとで参加する（あるいは辞退する）形式を採用していた。また、上記（7）でも一部述べたように、研究のいかなる時点でも、自らの意思でデータを撤回することを参加者に許容しており、研究倫理の面からも問題がないものと考えられる。

以上により、福井春菜氏の学位請求論文が、研究の方法や内容、記述の体裁や論理などすべてにおいて、本研究科の博士号に値する水準にあることを、審査委員会一同が認めた。